

実習報告書

案件番号： 2007H016A

氏名： 岡部

派遣国： インド

(1) 協力企業・受入企業概要

1. 派遣国 : インド
2. 氏名 : 岡 部
3. 派遣期間 : 2007年8月12日～2007年9月12日
4. 実習内容 : 翻訳業務
5. 受入企業名 : Vaksrujan Linguasoft Pvt. Ltd.
6. 受入企業概要
 - (1) 業種 : 翻訳業
 - (2) 設立年月日 : 1996年4月8日
 - (3) 資本金 : 3000万円
 - (4) 従業員数 : 45名
 - (5) 本社の所在地 : インド プネー市
 - (6) 工場の所在地 :
7. 協力企業名 : プラネットワークス株式会社
8. 協力企業概要
 - (1) 業種 : I Tサービス、言語サービス、海外事業コンサルティング
 - (2) 設立年月日 : 1998年3月16日
 - (3) 資本金 : 1645万円
 - (4) 従業員数 : 4名
 - (5) 本社の所在地 : 東京都渋谷区神南1-5-14 三船ビル406
9. 学生略歴
 - (1) 生年月日 : 1985年
 - (2) 大学(院) : 早稲田大学
 - (3) 専攻 : 国際教養学部

(2) 実習内容

1. 英語から日本語への翻訳。主にソフトウェア関係の翻訳。

労働時間は朝 9 時半から夜 6 時半まで。その間ひたすら翻訳作業を行う。翻訳者は 1 人 1 台パソコンが割り当てられていて、辞書やグーグルを使って翻訳を行っていた。わからない箇所は数人で話し合って相談していた。IT 関係、ソフトウェア関係の文書が主であり、親しみのない単語が多く翻訳に苦労した。出来上がった翻訳済みドキュメントは、校正担当者によって最終チェックが行われた。

2. 日本文化と日本語の話し言葉のレクチャー。

2 回レクチャーを行った。1 回目は日本文化を紹介し、年中行事や食べ物、建築物などの説明をした。私が持参したパソコンに写真がたくさん保存してあったため、それらの写真を交えながらレクチャーした。みな興味深く話を聞いてくれ、少しでも日本文化をわかってもらえたら嬉しい。2 回目は日本語の話し言葉を教えた。現地スタッフたちは日本語から英語の翻訳をしているだけあって、日本語を読む力には長けている。しかし、話す機会がないため日本語を話す能力は読解力に劣る。よってレクチャーではあいづちや気持ちの表現方法、「はい、いいえ」の自然な日本語表現などを紹介した。それから私たちと話すときは積極的に教えた話し言葉を使おうとしてくれた。ネイティブならではのレクチャーができたことが良かった。



写真 1. 翻訳の様子



写真 2. 日本文化レクチャー風景



写真 3. 日本文化レクチャー中の現地スタッフの様子

(3) 実習の成果

翻訳業務を担当することで、日本語独特の言い回しをいかにナチュラルな英語へ近づけるかを学んだ。初めはどうやって翻訳すればよいかわからず、しかも原文がソフトウェア関係の文書で内容もわからなかったため戸惑った。初めのほうは、1日が終わると大変疲弊していた。しかし段々とコツがつかめてき、グーグルなどを使いわからない単語の調べ方もうまくなってきたため、少しずつ上達してきたように思う。また、オフィスの方々と仲良くなっていくにつれ、英語の表現方法でわからないところを相談したり、またあちらの方々からも日本語の言い回しを聞かれたりと、相互に助け合いながら業務を行えた。さらに、前述の通り現地の翻訳スタッフは書かれている日本語を理解する力はあるが、会話力には乏しかった。初めは英語で話していたのだが、打ち解けてくると日本語でスタッフたちも話すよう努めてくれるようになった。彼女たちの日本語上達のためにも、私たちも日本語で話すようにし、新しい日本語をどんどん教えていった。話し言葉を積極的に教えることで、みんなも楽しんで使ってくれていた。1ヶ月それを続けることで、初めのほうより大分日本語を話す力がついたのではないかと思う。これがスタッフ方の日本語スキルアップのモチベーションになったらとても嬉しい。また、私たちが現地スタッフの方へ2回行ったレクチャーでは、写真や動画を交えながら日本文化を説明することで大変興味深く聞いてくださり、日本文化理解に貢献できた。また、セッション中に私たちが反対にインドの文化を聞くことで、お互い文化を紹介しあえた良い機会ともなった。さらに日本語話し言葉セッションでは、書き言葉とは異なる日本の自然な話し言葉を教えた。自然なあいづちの仕方や、「はい、いいえ」の言い方など、例文を交えながら紹介した。それ以後、スタッフ方は積極的にレクチャーしたことを使ってくださいだったのでとても嬉しかった。2回のレクチャー両方、みなメモをとりながら真剣に聞いてくださった。日本語を翻訳する仕事についているのだから、日本の文化や話し言葉を学ぶことでより日本理解を深めていただけたら良いと思う。

また、インターネットの普及により仕事をする上で国家間の壁というものは本当に少なくなっているのだと痛感した。特に翻訳において、初めはインド人がどうして日本語から英語の翻訳をするのか理解できなかった。というより、果たして本当に自然な翻訳が出来ているのかどうか疑問であった。しかし実際の現場を見てみると、これが実にうまく翻訳していた。スタッフは、みな完璧に日本語がわかるわけではない。翻訳文書にはわからない単語がズラズラ出てくる。しかしそれらをコピー&ペーストして検索することで、漢字の読み方がわからなくてもその意味を調べられるし、最も自然な訳語を調べることができる。専門用語であっても、インターネット上にいくらでもその情報がある。翻訳という今までだったらその言語やその分野に熟練した者だけが可能であった業務も、インターネットの普及によりその状況は一変した様に見えた。言語にネイティブなみに長けていなくとも、ネット上の辞書

や数多ある情報があれば翻訳は可能であることを学んだ。さらに、それをやる場所も世界中を問わないのである。文書をいちいち郵送しなくとも、ネットで瞬時に送れるようになったからだ。このような業務形態の変化は他の多くの仕事にも起こっていることであろう。その1つを間近で感じられた事はとても貴重であった。

また、インドで1ヶ月間生活したこともとても良い経験であった。トイレに紙はない、道路にはルールがほぼない、食べ物は甘い・辛いが極端、基本的に事は時間通りに進まない、日本では考えられないことの連続に戸惑いはあった。しかしだからこそ毎日新鮮なことに溢れていたし、日々冒険であった。日本ではあり得ないことでも、インドではあり得ているのだ。その現実を受け止め、ギャップを前向きに捉えると、インドでの生活は一気に楽しく魅力的なものになっていった。自分の常識にしがみついているのは、そこでは生きていけない。頭を常に柔軟に保ち、驚きのことにも「そういうのも、ありだよ」とさらっと受け流す力がついた。さらにコミュニケーションを取る重要性も改めて感じられた。オフィスの人と初めの数日はあまり打ち解けなかったが、少しずつ自分から話していくことで仲良くなり、私のこともわかってもらえるようになった。そうすると仕事もお互い協力し合えるし、職場の雰囲気も良くなる。また仕事以外の面でも休日を共に過ごしたり、一緒に遊んだり貴重な経験ができた。最後の別れが辛かったが、短い時間でここまで仲良くなれたことを嬉しく思う。やはり自分からコミュニケーションを取ろうとする態度が大切であった。また、マーケットで買い物をするときでもいかに店のおじさんとコミュニケーションを取るかで値段が決まった。ただ、安くしてとお願いするだけじゃダメである。例えば、店のおじさんに子どもの人数を聞いて、その子たちにお小遣いを10ルピーずつあげるから合計〇〇ルピーにして、などと交渉してみた。家族話を聞きだしたりしながら交渉すると、おじさんも話が乗ってきてこちらの言い値を了承してくれたりした。店先でもコミュニケーションが重要であった。また、そうすることでおじさんの家族写真を見られたり、動画を見せてくれたり、飲み物をくれようとしたり、買い物以外のコミュニケーションも生まれていった。これも日本とは程遠い違いであろう。この違いを面倒くさいから嫌だと感じたら、この国ではアウト。誰とであってもコミュニケーションを取ることの重要性を強く感じた。



写真4. 休日会社の方々と遠足に

(4) 受入企業への提言

校正者からのフィードバックがもっと必要である。翻訳スタッフが翻訳したものを、校正者は最終チェックするわけだが、そのチェック結果が必ずしもその翻訳者へ伝わっているわけではなかった。時間があるときはフィードバックをしているようであったが、毎回しているわけではなかった。これでは、どういう翻訳の仕方がより良いかということがわかりにくい。どういう点で修正が必要であったかを、最終チェック者が翻訳者と確認することは、翻訳の上達に必要であると思う。また、日本語の難しい言い回しなどに苦労している場面があった。例えば「全ての条件をたすき掛けする」というフレーズに苦労していた。これはその文脈からして、全ての条件を組み合わせてかけるということだったのだが、たすき掛けという部分が辞書で調べてもわからず困っていた。辞書やネットを使って調べれば大抵のことはわかるのだが、たまに独自の言い回しでネイティブの助けが必要な表現方法も出てきた。そのような場合に備え、誰か日本人の相談役などがいればもっと円滑で正確な翻訳が可能であろう。

(5) その他

1ヶ月という期間が信じられないくらい早く過ぎ去っていった。毎日が充実していた証だと思う。何もわからない私たちを、オフィスの方々は迎え入れてくださり、何から何までお世話になった。一緒に翻訳をやった方々とも本当に仲良くなり、休日には色々連れて行ってくれたので楽しい日々が過ごせた。インドで出会った全ての人に、心から感謝している。ありがとうございます。この貴重な経験を無駄にしないよう、これからの将来に役立てていきたい。また、オフィスで出会った方々とはずっと連絡を取り合っていくつもりである。協力企業の方々、JODCの方々、このプログラムに携わってくださった全ての方々に、本当に感謝している。貴重な経験ができたのも、その方々のサポートがあったからこそである。本当に、どうもありがとうございました。



写真 5. 現地の方々と共に